

「河を渡って木立の中へ」について

三 留 修

(1)

1940年に *For Whom the Bell Tolls* が発表されてから10年の間、*Ernest Hemingway* は作品を発表しなかった。そして1950年に出版されたのが *Across the River and Into the Trees* である。*Hemingway* は *The Killers* (1927), *The Short Happy Life of Francis Macomber* (1936), *The Snows of Kilimanjaro* (1936) など数多くの短篇小说や、*The Sun Also Rises* (1926), *A Farewell to Arms* (1929), *For Whom the Bell Tolls* などの長篇小説、また *Death in the Afternoon* (1932) や、*Green Hills of Africa* (1935) のような異色の作品を発表して、アメリカ文学の中で名声をほしいままにしていた。 *Across the River and Into the Trees* も当然、期待の眼をもって読まれたはずである。しかし *Hemingway* に対する期待が大きかったためか、彼の作風に対して一つの型ができあがっていたためか、この作品の世評はあまりよくなかったようである。ではこの作品は、*Hemingway* の作品の中でそれほど質的に低いものなのか、また第二次世界大戦をはさんで10年間の沈黙があったとはいえ、彼の作品にどのような変化があったのか、そして主人公の描き方がどうかについて論じてみたい。主人公については、仏大文学論集第10号で述べた小論とも関連させながら論ずることにする。

Across the River and Into the Trees の物語は、*Hemingway* の他の作品と同じように主人公と美しい女性との恋が中心に描かれている。主人公の

Richard Cantwell は、51才のアメリカ陸軍歩兵大佐で、現在イタリアのトリエステに駐在している。第一章ではタリアメント河口である日曜日に鴨猟をする情景が描かれ、第二章からは Cantwell の金曜日から土曜日にかけての行動が回想風に描かれている。Cantwell は外見からは健康そうに見えるが、実は心臓が悪くていつも強心剤を持ち歩いている。彼はこれまでに三度結婚したことがあるが現在は独身である。彼はトリエステからヴェニスまで車をとばしてやって来て、グリッティ・ホテルへ入る前にそのホテルのバーで Renata に会う。Renata はイタリアの名門の伯爵令嬢で、Cantwell からみると娘（19才）といってよいほど若い女性である。彼は飲み友だちの Andrea に彼女を紹介される。Renata は Cantwell を愛するようになってしまう。Cantwell は長い軍隊生活のために非常に武骨な人間となり、町を見ても、橋を見ても、寺院を見ても、すべて軍人の眼でそれらを見てしまう。軍隊しか知らない彼は娘のような Renata にすっかりひかれていく。しかし彼は Renata と一つの毛布にくるまっていながらも軍隊の話ばかりするのである。彼は前線の実情を知らない上官の愚かな命令に従ったために部下の一個連隊を全滅させてしまったことを語り、ドイツ兵の死体を犬や猫がむさぼり食っているさまを思い出しては語り、自分の上官の無能さを語る。Cantwell の堅物であることを示している部分の一例をあげると、彼はサンタ・マリア・デル・ジリオ教会を見て次のように表現するのである。

What a fine, compact, and yet ready to be air-borne building, he thought. I never realized a small church could look like a P 47. Must find out when it was built and who built it. Damn, I wish I might walk around this town all my life. All my life, he thought. What a gag that is. A gag to gag on. A throttle to throttle you with. Come on, boy, he said to himself. No horse named Morbid ever won a race. ^①（なんと立派な、ぎっしり詰まった、しかもいまにも空に飛び出していきそうな建物なんだろう、と彼は思った。俺は小さな教会が

P 49に似うるとはわからなかった。この教会がいつ建てられて、誰が建てたのかを調べてみなければならない。畜生、俺は一生かけてこの町を歩きまわってみたいものだ。俺の一生か、と彼は思った。何たるダジャレだ。さるぐつわでもかましてやりたいダジャレだ。絞め殺してやりたいのだ。まあ、元氣を出せ、と自分に言い聞かせた。モービッドウ（病的な）などと名前をつけられた馬が競馬で勝ったことなどないんだ。）

このように何を見ても彼は軍人の眼でしかものを見ようとしない。Renataと話す時でも、彼は軍隊のことを話題にするか、自分の年令を意識して、Renataを怒らせるようなことばかり言う。しかも彼は同じようなことばかり喋っているのである。この19才のRenataが、なぜもうじき死ぬとわかっている50男に恋をするようになったのかははっきりしない。彼女の年令についてCarlos Bakerは次のように言っている。

A second important clue to her symbolic identity is Renata's age. She is "nearly nineteen," which is precisely the age of the young Cantwell when he got his big wound — the wound that still makes him walk crookedly—at Fossalta in 1918. Her youth, her freshness, and her bravery, like the seemingly inborn wisdom she sometimes displays, are qualities which evidently belonged to young Lieutenant Cantwell in that winter of his rapid grown-up.^②（彼女の象徴的な人物に対する次の重要な手がかりはレナータの年令である。彼女は「すぐ19才」であり、それは1918年にフォッサルタで重傷を負った時の若きキャントウエルの年令と全く同じである。——その時の負傷のために今だに彼はビッコをひきながら歩く。彼女が時折みせる生れつきの分別のようにみえる彼女の若さ、はつらつき、勇敢なところは、あきらかに、どんどん成長していたあの冬の若きキャントウエル中尉の特徴である。）

Baker は他の部分についても象徴ということを言っているが、それについては後で述べることにする。ここでは、あまりにも若い Renata の年齢について、Cantwell が負傷した時と一致させている、つまり Hemingway の技巧の一つとして Baker はみている、ということにとどめる。といっても、まだこの言葉だけでは彼女の年齢がなぜこのように若くなければならないかという点についてはわからない。Cantwell は狩猟のためにヴェニスへやって来たはずなのに、Renata を知り、二人でバーで飲み、ホテルに泊り、ゴンドラに乗り、またホテルに戻るという生活を二日二晩楽しみ、その間彼は軍隊についての同じようなことばかりをくり返し彼女に話しているのである。やがて彼は彼女と別れてトリエステに向い、その途中、自動車の中で心臓麻痺で死ぬのである。南軍の将軍 Stonewall Jackson の ‘No, no, let us cross over the river and rest under the shade of the trees.’^⑨（いや、われわれは河を渡って木蔭で休息しよう。）という言葉の口にながら。「河」は Hemingway にとっては、Nick が *Big Two-Hearted River* (1925) で釣を楽しんだが、*A Farewell to Arms* においても、*For Whom the Bell Tolls* においても危険な出来事の起こる場所である。したがって「河を渡って」危険を逃れて木立の下で休息しようというのである。つまり安らかな眠りにつこうということである。

Across the River and Into the Trees にいたるまでの、とくに長篇小説では、*The Sun Also Rises*, *A Farewell to Arms*, *For Whom the Bell Tolls* が非常に大きな評判になり名作として残っている。これらの物語はいずれもその中に男女の愛が描かれていて、*Across the River and Into the Trees* においても Richard Cantwell と Renata との愛情生活が描かれている。しかしこの作品は、Hemingway が10年もの沈黙の後に発表した作品であるにもかかわらず、もう一つ高い評価を得るに到っていないのはなぜだろうか。これまでの作品には主人公が生きるにしても、闘うにしても、死が迫っていたので緊迫感があるのに、主人公の Cantwell の生き方には Renata との恋に生きる時、緊迫感が感じられないのである。これがこの作品を退屈なものにしてい

る大きな原因であると思う。Philip Young はこの作品の欠点について次のようにくわしく論じている。

To be sure, this is a poor performance. It is the story of a peace-time army colonel (but almost an exact self-portrait) who comes leave to Venice to go duck-shooting, to see his very young girl friend, and to die, all of which he does. The colonel is the hero again, this time called Richard Cantwell, and he was all the old scars, particularly the specific ones he received as Frederic Henry in *A Farewell to Arms*. Again there is the “Hemingway heroine,” a title that designates the British nurse, Catherine, of that novel, and the Spanish girl Maria of *For Whom the Bell Tolls*, and now the young Italian countess Renata of this novel. (They are all pretty much the same girl, though for some reason their nationality keeps changing, as the hero’s never does, and they grow younger as the hero ages.) There are also many signs of the “code.” But the code in this book has become a sort of joke; the hero has become a good deal of a bore, and the heroine has become a wispy dream. The distance that Hemingway once maintained between himself and his protagonist has disappeared, to leave us with a self-indulgent chronicling of the author’s every opinion; he acts as though he were being interviewed. The novel reads like a parody of the earlier works.^④ (たしかにこれはまづい作品である。それは平和時におけるある陸軍大佐の話だが(ほとんど正確と言ってもよい自己描写である), 彼は休暇を取ってヴェニスに出かけ, 野鴨を射ち, 非常に若い女友達に会い, そして死ぬつもりである。そしてまたそれら全部を実際にやってのけるのである。この大佐はまたもヘミングウェイ的主人公で, ここではリチャード・キャントウェルと呼ばれており, 他の作品の主人公たちの古傷のすべてを持

っているが、特に、「武器よさらば」のフレデリック・ヘンリーが受けたのと同じ膝頭の負傷がはっきりしている。ここにはまた「ヘミングウェイ的女主人公」が現われる。それは「武器よさらば」では英国人看護婦キャサリン、「誰がために鐘は鳴る」ではスペイン娘マリア、そしてここでは若いイタリア人の女伯爵レナータとして現われる。(彼女たちはみな同じような娘だが、どういう理由からか主人公の国籍は変らないのに、国籍がいつも変り、また主人公が年を取るにつれて彼女たちは若くなっていく)。また「掟」があるのを示す徴候もある。しかしこの本の中では掟は一種の冗談となっている。主人公はかなり退屈な人物になり、女主人公はちっぽけな夢になってしまっている。かつてヘミングウェイが自分自身と主役との間に置いていた距離は消滅してしまい、作者のあらゆる意見の自己満足的な記録が残されているだけである。主人公はまるで記者会見をされている時のように振舞っている。この小説は初期の作品の模倣文のような印象を与える。)

長くなるのをいわずに引用したが、Young のこの文章には *Across the River and Into the Trees* の欠点をあますことなく言いあてていると思う。まず物語が Cantwell の休暇中の話で、*A Farewell to Arms* や *For Whom the Bell Tolls* のように主人公が生命をかけて闘うような追いつめられたところがない。戦争が描かれているとはいっても回想のみで、前記の二つの作品に描かれているような激しさがなく、どうしても目的を達成しようというねばりも Cantwell にはない。彼は過去に見てきた、また戦ってきた戦争の話をバーで飲みながら、あるいはゴンドラに乗りながら Renata に話して聞かせるだけである。彼は確実に120人は殺したとか、ドイツ兵を殺したが、ドイツ兵をにくむ気にはなれないとか、過去の話ばかりしている。Young の言うように Cantwell は退屈な人間で、他の作品の主人公の古傷をすべて持っている。この作品が出て二年後の1952年に *The Old Man and the Sea* が発表されたことを考えると、やはり谷口陸男氏の言うように、

「河を渡って木立の中へ」について

「河を渡って木立の中へ」は目立った動機も必然性もなしに書かれ、文字どおり休息の時に書かれた作品である。いかなる作家といえども休息を欲し、息抜きの作品を書く場合はありうる。この作品の弱さはとがめる必要はない。ただ、この「河を渡って木立の中へ」の功績は、作者の社会的関心や人生肯定が著しく影の薄い一時的な現象にすぎなかったことを示して見せたこと、そして同時に、生の無目的と死を作品の中に導入しても、役割を終えた老人の自然死のごときものでは、けっして作品に価値を与えることにはならないこと——人間の直面する危機が眼前の事実として捕えられず、またそれに対応する緊張感として描かれるのでなければ、彼の作品は魅力の大半が喪失することをも教えているところにある。いいかえれば、ヘミングウェイの小説は一步を誤れば通俗小説そのものになり終り、ハードボイルドといわれる彼の態度も、緊張を欠くときは直ちに感傷に転化する性質を持つものであることを示したところにある。^⑤」

ということになるのであろうか。相当皮肉な見方である。自然死のようなものではけっして作品に価値を与えることにならないといっても、Hemingway は *The Snows of Kilimanjaro* では見事成功させているし、Hemingway のように用意周到な作家が動機も必然性もなしに作品を書くとは思われないのだが、緊張感のない作品に魅力のないというのはたしかである。谷口氏のいう通り、この作品には人間の直面する危険が眼前の事実としてとらえられず、緊張感がないために Hemingway 文学の特徴が生きていないのである。この作品は Young の言う、初期の作品の模倣文のような印象を与える、というのも戦争が扱われ、狩猟があり、Cantwell と Renata の恋があるというだけのものであるからである。Cantwell が語る昔の戦場は作者 Hemingway にとっても古戦場であった。自動車がトリエステからヴェニスに近づく。タリアメント河が流れているが、この河は *A Farewell to Arms* の *Frederic Henry* が軍隊から逃亡する時に飛び込んだ河であり、Cantwell は1918年に負傷した

ことになっているが、Hemingway 自身も1918年にミラノで脚に負傷し、ミラノ陸軍病院で3カ月の入院生活を送っている。そして彼は退院後、ふたたび中尉待遇でイタリア軍に投じている。このような回顧談ばかりなので、物語もただだと長くて、Hemingway の短篇小説や *A Farewell to Arms* にみられる、無駄のない歯切れのよさが無い。 *Killers* (1927) の簡潔な文体、物語の流れもなければ、 *Indian Camp* (1924) のような強烈な生と死も描かれていない。 *Across the River and Into the Trees* で Hemingway は何を言おうとしているのかをつかみにくいのである。 Hemingway は *Death in the Afternoon* (1932) の16章で、作家は小説を書くときには血の通った人間を描き出さなければならない。作家が生きた人間を書けたときには作品にはそれなりの価値がある、というようなことを言っておきながら、同書の13章では、芸術家には、ついていない日もあるが、次にうまくいけば世間の人は許してくれるだろう、と言う。 *Across the River and Into the Trees* の後に *The Old Man and the Sea* が出されるのを Hemingway は20年前に予測していたかのようにである。

Cantwell は最後に死ぬことになるが、 *A Farewell to Arms* で女主人公の Catherine Barkley が出産時の出血多量で死ぬのを除くと、その他の *The Short Happy Life of Francis Macomber* (1936) で Francis Macomber, *The Snows of Kilimanjaro* (1936) で Harry, *To Have and Have Not* (1937) で Harry Morgan, *For Whom the Bell Tolls* で Robert Jordan というように主人公のほうが生命を落としている。 Hemingway の作品のパターンに Cantwell の場合もあてはまるわけで、Young の「この小説は初期の作品の模倣文のような印象を与える」という指摘の通りと言えそうである。残念ながら、 *Across the River and Into the Trees* には Hemingway のこれまでの作品とくらべて、作品の構成以外には何ら新しい点が見られないのである。死んでいく主人公たちでも、 Francis Mcomber は勇気がないと妻の Margot に軽蔑されていたが、傷ついた水牛と対したときには、夫の危険を感じ

て Margot が思わず掩護射撃しないではいられないほどの勇気を彼はみせた。*The Snows of Kilimanjaro* の Harry は死ぬとわかっていても、Helen に対して最後まで手こずらせるようなことばかり言って自分の生を確認していた。*To Have and Have Not* の Harry Morgan は銀行強盗をしてきた革命を夢みるキューバー人数名と闘い、相手を皆殺しにするが自分も射たれて死ぬ。Robert Jordan は自分の生命をかけて鉄橋爆破を成功させたが、自分も生命を落とす。では Richard Cantwell はどうだったかというと、彼は何もしていない。彼は鴨猟に出てもうまくいかず、Renata と親しくなっただけで、無気力だといわれた Jake Barnes が出かける *The Sun Also Rises* における闘牛と比べても何とも Hemingway らしい迫力に欠ける。彼はトリエステへの車中で死んでしまう。Hemingway の作品の主人公が、初期の作品からだんだん年をとってくることから51才という年令を考慮しても、Cantwell の死は悲劇というよりも、Hemingway のパターン通りに彼は殺されてしまったようなユーモラスな感じさえるのである。

鴨猟のシーンにしても、これまでの Hemingway の作品に出てきた、猛獣狩りや、魚釣り、ボクシング、闘牛のような迫力のある狩猟ではないし、戦争については回想的な話ばかりで、鉄橋爆破も、前線での活躍の場面もない。ここに Hemingway の作品の中でもとくに、どこか魅力のない緊迫感のないものになっている原因があるのだと思う。*Death in the Afternoon* の第11章で Hemingway は、

Madame, all stories, if continued far enough, end in death, and he is no true-story teller who would keep that from you. (マダム、すべての物語は十分に長く続けられたら死に終るものなのです。死をよせつけないようにしようとする人は本当の作家ではありません。)

と書いているのである。死というものが、Hemingway にとっては大きなテーマであることはすでに言われていることであるが、*Across the River and Into the Trees* 以前の作品の死んでいった主人公たちは上でも述べたように

簡単に死んでしまったのではない。彼らは生きるのをあきらめて死を選んだのではなく、彼らは最後の最後まで闘って目的を達成したが、自分は生命を落とす結果になってしまうのである。彼らは徹底的に死に抵抗したのである。それにくらべて Cantwell の場合はどうか。

‘Why do you look sad now?’

‘Do I?’

‘Yes.’

‘I am not, really. I am as happy as I ever am. Truly. Please believe me, Richard. But how would you like to be a girl nineteen years old in love with *a man over fifty years old that you knew was going die?*’

‘You put it a little bluntly, the Colonel said. ‘But you are very beautiful when you say it.’

‘I never cry,’ the girl said. ‘Never, I made a rule not to. But I would cry now.’

‘Don’t cry,’ the Colonel said. ‘I’m gentle now and the hell with the rest of it.’

‘Say once again that you love me.’

‘I love you and I love you and I love you.’

‘*Will you do your best not to die?*’

‘Yes.’

‘*What did the doctor say?*’

‘So- so.’

‘Not worse?’

‘No,’ he lied.^⑦ (イタリックスは筆者)

(「なぜ君は悲しそうな顔をしているの?」「私が?」「うん」「ほんとうに私は悲しくないわ。これまでと同じぐらい幸せよ。リチャード、私の言

うことを信じてね。でも死ぬとわかっている50すぎの男性に恋をする19才の少女がいることをどう思いますか?」「ちよっと露骨だな。でもそんなことを言う時、君はきれいだよ」「私は決して泣かないわ」と少女は言った。「決して。泣かないという規則を作ってしまったの。でもいまは泣きたいわ」「泣かないでくれ」と大佐は言った。「わしは今おだやかだし、その他のことはどうなってもいいよ」「もう一度愛していると言って」「君を愛しているよ。とても愛しているよ」「死なないように本当に気をつけてくれる?」「よし」「お医者さんはどう言っているの」「まずまずだ」「前より悪くなってないって?」「うん」と彼はうそをついた。)

この文章でもわかるように Cantwell は、Renata に間もなく死ぬ人だと言われても、それほど動揺の色を見せない。むしろ自分でも生きることにあきらめているようである。彼は病気を直す努力をすることなく、ただ漠然と Renata との短い間の恋にひたっているだけである。ここでの会話はめずらしく Renata の方から問いかけていて、Cantwell の方も素直に答えている。最後の部分は彼女に心配かけまいとしてうそをつくが、先にも述べたように Cantwell は Renata に軍隊のことばかり話しているのだが、ここでは彼女の心配げな態度をやわらげてやろうという彼の心づかいが感じられる。Cantwell は Renata に 'I wish we could be married and five sons.'^⑧（「君と結婚して男の子を5人もてたらいいな」）と夢のようなことを言ったり、'One Hundred and twenty-two sures. Not counting possibles.'^⑨（「はっきりしているので122人殺した。殺したかもしれないのは数に入れえないでね」）と自分の軍隊での活躍ぶりを自慢したり、'Daughter,' he said and he was talking to her and not to a picture now. 'Please know I love you and that I wish to be delicate and good. And please stay with me always now.'^⑩（「娘よ」と彼は言った。いまは肖像画ではなく、彼女に話しかけているのだった。「わしが君を愛していること、そして神経のいきとど

く、いい人になりたいと思っていることをわかってくれ。だからもうずっとわしのそばにいてくれ」といったり、彼は彼女に、ある時は恋人に、ある時は娘に話しかけるような会話を続ける。Cantwell に時には Hemingway 的人物らしい自慢げな態度が表われるかと思うと、哀願するような口ぶりになったりするが、彼のこのような言葉に Renata はいちいちその場に応じた受け答えをしている。この Cantwell は *A Farewell to Arms* の Frederic Henry, *To Have and Have Not* の Harry Morgan, *For Whom the Bell Tolls* の Robert Jordan などとは似ても似つかぬ人物である。Cantwell は必死の思いで、人生を生き抜こうという気持ちをもっていない。上の Cantwell と Renata との会話においても、彼はすでに職業をもった人間の生き方ではなく、51才の男性にしてはいかに老化した人間の姿である。Cantwell はすでにあきらめ切った人間の生き方で、Renata に対する気持だけが、彼の真剣に闘っている姿で、それ以外には戦場で闘う体力、気力も、アフリカなどでの狩猟でも猛獣と闘う強さは彼の身体からはもうみられない。

Renata について少しみていくと、彼女は Cantwell を愛していると言っているが、同等の立場での恋ではなくて、たえず Cantwell の話し相手として聞き役にまわっている。彼女は Cantwell と結婚できるなどとは思っていないし、引用文にもあるように泣かない決心をした。彼女はただ Cantwell を愛している、という状態にあればよいとし、自分からは彼の重荷になるようなことはせず、また口にも出さないでひたすら Cantwell の話し相手として彼にやさしくつくすのである。上に Carlos Baker の文を引用し、Renata の19才という年齢は Cantwell の過去の回想を表わしているとして象徴という言葉を使ったが、Baker はいろいろなところに象徴をあてはめているのである。たとえば *A Farewell to Arms* の雨は不幸の象徴、*The Killers* (1927) の中の壁は絶望の象徴、*A Farewell to Arms* やこの作品の河は幸福へ向う象徴といった具合だが、抽象的なものよりも具体的なものに、説明よりも描写に頼る傾向のある Hemingway の場合は象徴がつかわれるのはそれほどめず

らしいことではない。ただ壁や河はすぐにその作品のみで判断できるが、この作品の Renata の年令を象徴とみるとき、当を得ているとは思いますが、Hemingway の他の作品、あるいは伝記までもある程度知っていなければならないとすると、Baker のいう象徴は、それほど Hemingway の作品を鑑賞する上に重きをおかなくてもよいと思う。*A Farewell to Arms* にしても *The Killers* にしても、主人公の生き方に闘う緊迫感があったからこそ生き生きとした作品になったのである。闘う気力のある主人公がいる時、それも一つの掟があって、その中で闘う姿が描かれ、またテンポのはやさがある時 Hemingway の作品には Hemingway らしさが出てくるのである。*Across the River and Into the Trees* にはそういったものがみられない点で Hemingway の作品の中では、これは一休みした作品といわれても仕方がないであろう。主人公に覇気がなくて、物語もかなり退屈なもので、いくら構成上の変化はあってもその効果はそれほどあがっていない。A. E. Hotcher は *Across the River and Into the River* の不評で Hemingway はそれを気にしていた。そしてこのことが Hemingway の憂うつ症の主な原因になったのではないかと、^⑪と言っているが、案外当たっているのかもしれない。もっとも Hotchner はかなりジャーナリスティックな人だから全くその通りとは言いきれないが、世評を非常に気にする Hemingway の性格を考えるとうなづける点もある。また Hemingway は非常に用心深い、用意周到な男で、作品の推敲をこまかく、何度でもやる作家であるから、*Across the River and Into the River* が Hemingway にとって自信作であったか、と考える時、この作品の2年後に *The Old Man and the Sea* が出されるのであるから、Hemingway もあまり自信はなかったのではないかと思われる。彼は生命をかけて闘っている人間を描くとき、作品にも精気がみなぎり、悟り切ったような人間を描くときには、その人間の年令に関係なく作品にも何かもの足りなさがみられるようである。

ここでは主人公 Richard Cantwell だけにしぼって、他の主人公とのつながりとも関連して、どのような人物として描かれているかについて述べてみたい。(1)において Cantwell については述べているが他の作品とどのようにつながるであろうか。先に仏大文学論集10号の拙稿で、Nick 物語の Nick Adams, *The Sun Also Rises* の Jake Barnes, *A Farewell to Arms* の Frederic Henry, *To Have and Have Not* の Harry Morgan, *For Whom the Bell Tolls* の Robert Jordan, *The Old Man and the Sea* の老人 Santiago は一連の人物で Hemingway 的主人公の成長していった姿であると述べた。では *Across the River and Into the Trees* の Richard Cantwell はこの一連の人物の中に入るのか、または入らないのかを検討していくことにする。

Nick Adamsから始まって Santiago にいたる上記の主人公たちは勇気があって、鋭い観察力を持ち、一度決めたことに関しては迷わずに追求し、たとえ敗れても後悔などしない人物である。彼らはある時は生命をかけてまでも目的を果たそうとする。ところが *Across the River and Into the Trees* の Richard Cantwell はどうも少しちがうようである。Nick Adams の性格の中でも *Ten Indians* (1927) の Nick は女の子にふられてめめめしている性格を持っていた。Nick 物語の中で弱々しい面がみられた Nick からはじまって Cantwell が書かれるまでの作品につながるような主人公が他の作品の中にもみられるのである。*The Sun Also Rises* の Jake Barnes は人生に目的がなく、戦後の平穏な時代に生きながら、無気力な生き方をしていた。いやむしろアメリカ人の Jake Barnes は第一次世界大戦に加わり、イタリア戦線で負傷し、性的に不能になってしまう。彼は新聞記者としての仕事もしているのであるが、一方では夜のバリをさまよいながら、酒を飲み、ダンスをし、Brett Ashley という女性と親しくなっていく。遊び歩く Jake Barnes には生きる

目的のようなものは見当たらず、彼女と一緒にいても、闘牛見物をしても心のうさは晴れない。しかし Cantwell 大佐に将来の見通し、希望が見当たらないのとはちがって、Jake Barnes には若さがあり、現在はだらだらと生きてるように見えても、近い将来にはまた戦場に向う力をとりもどす希望と体力を持っている。Jake Barnes の場合は負傷し、不能になったとはいえ、第一次世界大戦後の一時的な挫折にすぎない。

The Short Happy Life of Francis Macomber の主人公 Francis Macomber はアフリカのタンガニカに妻の Margot と狩猟にくるが、その前から彼は Margot との結婚生活が破れるのではないかという気持ちにとらわれている。この狩猟で彼は Margot の信頼を得られるのではないかということを期待しているが、狩猟の最初の日に、ライオンを追いつめながら彼の臆病なためにとり逃がしてしまい、かえって彼女に軽蔑される結果に終わってしまうのである。この時は結局プロの狩猟家の Wilson がしとめたライオンをいかにも Macomber がしとめたようにみせかけたために、妻だけではなく土地の鉄砲かつぎにまで軽蔑されることになる。そして Margot は勇敢な Wilson にひかれるようになり、その晩彼女は Wilson のテントに行く。彼女は力の強い者にあこがれる性格をもっている。その翌日、Macomber は人変ったように勇気を出して、水牛と相対する。傷ついた水牛が Macomber を目がけて突っかかってきても、彼は逃げるようなそぶりを全く見せずに連続的に射ちまくるのだが、すべて弾丸が高くて当たらない。Margot は夫を救うために射ったが、その弾丸が夫の頭に命中してしまう。それを Wilson は Margot がいかにも Macomber をねらって打ったかのように次のように言う。

‘That was a pretty thing to do,’ he said in a toneless voice. ‘He would have left you too.’

‘Stop it,’ she said.

‘Of course it’s an accident,’ he said. ‘I know that.’

‘Stop it,’ she said.

‘Don’t worry,’ he said. ‘There will be a certain amount of unpleasantness but I will have some photographs taken that will be very useful at the inquest. There’s testimony of the gun-bearers and the driver too. You’re perfectly all right.’

‘Stop it,’ she said.⁽¹²⁾ (「とんでもないことをしでかしましたね」と彼は抑揚のない声で言った。「彼の方でもあなたを捨てるつもりでいたでしょうに」「やめて」と彼女は言った。「もちろん事故ですよ。それはわかっています」と彼は言った。「いわないで」と彼女は言った。「心配しないで下さい」と彼は言った。「かなり不愉快なことはあるでしょうが、調べる時に大いに役に立つよう写真をとらせておきましょう。また鉄砲持ちと運転手の証言もあります。あなたは全く大丈夫ですよ」「やめて」と彼女は言った。)

Wilson の言った通り、Margot がわざと Macomber をねらって射ったのかどうかはわからないが、Wilson は完全に Margot の殺人とみているのである。このようにして Macomber は生命を落とすことになるが、わずかの時間だけは男らしい勇気をみせて、「短い幸福な生涯」を終る。この最後の勇気をみせるまでは、Macomber は Hemingway 的的主人公ではなくて、男らしくない。最後にみせた Macomber の姿は *Across the River and Into the Trees* の Cantwell のような心身ともに弱くなっている人物ではないが、Macomber には Cantwell に似た性格をも持ち合わせている。

The Snows of Kilimanjaro の Harry は才能をつぶしてしまった作家でアフリカへ狩猟に来ている点では上に述べた *The Short Happy Life of Francis Macomber* の Macomber の場合と同じだが、Harry はちよっとした切り傷から壊疽になり、自分が死ぬことを予想している。Harry はそばにっている Helen を困らせるようなことばかり言っては自分が生きていることを確認している。しかも彼は次から次へと女性を代えていき、しかもその女性が前の女性よりも金持ちになっていく。そういう金持ちの恋人のおかげで彼

はのんびりした生活を送れるようになっているのであるから、彼は決して勇氣のある、たくましい男性ではない。中でも現在の恋人 Margot がこれまでの恋人のうちでもっとも金持ちである。Margot に対して Harry は愛していると言っているかとおもうと、すぐそのあとで彼女のことを金持の牝犬め (You rich bitch) とどなったりしては自分の生きていることを示している。彼が自分が死ぬときには、あとには何も残さずに行きたいと言う。Harry は Francis Macomber とかなり似た人物で、*The Sun Also Rises* の Jake Barnes などとも共通点がありそうな人物である。*The Snows of Kilimanjaro* には Harry と Helen との会話と並行して意識の流れふうの回想する部分がかかなりある。Harry ははじめから終りまで、ベッドに横になったままで最後には息をひきとっている。Harry は自分の死をはっきりと意識しているために将来の生き方には全く望みを持たず、Helen のなぐさめの言葉も耳に入らず、最後の抵抗のように Helen ににくまれ口をきくのである。Harry は Robert Cantwell のようにあっさりとして死を容認することができないのである。しかし Harry もだんだん自分の脚の感覚がなくなってくると、Helen に対してもかなり弱々しい応答になる。

‘How do you feel?’ she said. She had come out from the tent now after her bath.

‘All right.’

‘Could you eat now?’ He saw Molo behind her with the folding table and the other boy with the dishes.

‘I want to write,’ he said.

‘You ought to take some broth to keep your strength up.’

‘I’m going to die to-night,’ he said. ‘I don’t need my strength up.’

‘Don’t be melodramatic, Harry, please,’ she said.

‘Why don’t you use your nose? I’m rotted half-way up my thigh

now. What the hell should I fool with broth for? Molo, bring whisky-soda.'

'Please take the broth,' she said gently. 'All right.'¹³

（「気分はいかがですか？」と彼女が言った。彼女は身体を洗っていまテントから出てきたところだった。「いいよ」「いま食べられますか」彼女のうしろに、モロが折りたたみのテーブルをもっていて、もう一人の少年が皿をもっているのがみえた。「ぼくは小説を書きたいんだ」と彼は言った。「力をつけておくためにスープを飲まなければいけませんわ」「ぼくは今晚死ぬんだ」と彼は言った。「力をつける必要なんかないよ」「ハリー、おねがいですから、芝居するのはやめて下さい」と彼女は言った。「なぜ君は鼻を使わないんだ？ぼくはもう腿の半分まで腐ってきてるんだ。いったいなんのためにスープなどをごちゃごちゃ飲まなければならないんだ？モロ、ウィスキー・ソーダを持ってこい」「おねがいだから、スープを飲んで下さい」と彼女はやさしく言った。「わかった」）

はじめの頃はきつい言葉ばかり吐いていた Harry が、Helen のたのみにこのようにあっさり聞き入れてしまった。ついに死に近いことを悟った Harry のねばりもここまでで、Helen の言うことを素直に聞き、反論する元気もなくなってしまったのである。

Jake Barnes, Francis Macomber, Harry から *Across the River and Into the Trees* の Robert Cantwell と続いた Hemingway 的でない主人公も最後には *The Old Man and the Sea* の老人にとつながっていくのである。老人 Santiago は Hemingway 的主人公の強さと、Cantwell のような弱さ、とくに肉体的な衰えの両方の性質をもった人物である。

Hemingway の作品を論ずる時、必ず死という言葉が出てくるが、Hemingway 自身の負傷の経験を知れば、彼の作品に出てくるすさまじいばかりの肉体的な闘いに対する執着ぶりがわかると思う。Young はこの点について次

のように述べている。

A list of his major injuries is certainly impressive and possibly significant. His skull has been fractured at least once; he has sustained at least a dozen brain concussions, several of them serious ones; he has been in three serious automobile accidents; and a few years ago in the African jungle he was in two airplane accidents in the space of two days, during which time he suffered severe internal injuries, "Jammed" his spine, and received a concussion so violent that his eyesight was impaired for some time. (It was on this occasion that quite a few newspapers printed obituaries, which he read, after his recovery, with great pleasure; the notices were favorable.) In warfare alone he has been shot through nine parts of the body, and has sustained six head wounds. When he was blown up in Italy at the age of eighteen, and was left, for a time, for dead, the doctors removed all of the 237 steel fragments which had penetrated him that they could get at. (彼の主だった傷を数え上げるとたしかに驚くべきものがあり、また恐らくは大きな意味を持つものであろう。彼の頭蓋骨は少なくとも1度は骨折しているし、少なくとも12回は脳震蕩を起こし、7回は重体となったことがある。ひどい自動車事故には3回会っているし、数年前アフリカのジャングルで2日間に2回の飛行機事故に会っている。そのときはひどい内部傷害を受け、背椎骨が「押しつぶされ」、激しい震蕩のためしばらくの間視力が損われたほどであった。(かなりの新聞が死亡記事を書いたのはこの時期で、彼は回復後それを大いに楽しんで読んだし記事は好意的だった。) 戦争中だけでも彼は身体の9カ所を撃たれ、6カ所の頭傷を負った。18才のときイタリアで爆撃に吹き飛ばされ、しばらくの間死んだものとして残された時、医者たちが彼の体内をつら抜いた、たしかめられた弾片を237個すべてをとり去った。)

Hemingway はこのような、人間とは思われないような体験の持ち主であるから、彼の作品は自伝的といわれていても現実感があり、生きた人間を描けるわけである。生への執念、死と闘うときの Hemingway 的主人公には大きな影響を与えているわけである。*The Old Man and the Sea* の老人はそのすべての道を通ってきた人物と考えることができるであろう。そしてその前の Cantwell もやはり人間が受けて、耐えられるぎりぎりの線を耐え抜いてきた肉体的打撃の跡が残っている人物で、過去にさかのぼって自分の元気だった頃の思い出にふけて Renata に話しているのであるとみれば、*Across the River and Into the Trees* の作品の位置はわかると思う。ただこの作品一つをとり出して読む場合には上に述べたように、やはり退屈な作品であろう。Hemingway の作品全体からみていくとやはり欠かすことのできない作品であることがわかる。第一次世界大戦後に書かれた *The Sun Also Rises* で Hemingway は lost generation の代名詞のようにいわれ、また第二次世界大戦の後に書いた *Across the River and Into the Trees* もやはり主人公は少々年令が高いけれども一種の lost generation の作品といってもよいのではないだろうか。

ここで主人公についてまとめると、Nick Adams から *The Sun Also Rises* の Jake Barnes, *A Farewell to Arms* の Frederic Henry, *To Have and Have Not* の Harry Morgan, *For Whom the Bell Tolls* の Robert Jordan, *The Old Man and the Sea* の老人は、Jake Barnes を除いて他はみんな一度は目的を達成するが、すぐに生命または恋人、獲物を失うことになり、幸福は長くは続かない。この一本の線につながる、勇気のある、闘う主人公がいる一方、また Nick Adams から Jake Barnes, *The Short Happy Life of Francis Macomber* の Francis Macomber, *The Snows of Kilimanjaro* の Harry, *Across the River and Into the Trees* の Richard Cantwell, 老人 Santiago とつづいていく、Hemingway 的でない主人公のつながりがある。はじめと最後が同じで途中で挫折感をもっている主人公が描

かれている作品があるわけである。勇気のある男たちが力一杯闘っている姿がある一方では、何を目的に生きていいのかわからなかったり、負傷や病気で立ち直れる自信がなく、生きる望みを失っている人物を Hemingway は描いているわけである。Hemingway の世界は非常に狭い世界で結局は闘いをしている世界である。肉体的、精神的に闘い、ある時は勝利を得、ある時は敗れるが、忍耐、勇気、能力をねばり強く発揮し、たえず恐怖に耐え、緊迫感を感じる世界で主人公たちは生きていくのである。Hemingway は「河を渡って木立の中」で休息をとって *The Old Man and the Sea* へのスタートを切るのである。

Notes

- ① *Across the River and Into the Trees*, Jonathan Cape, 1964, p. 67.
- ② *Hemingway, The Writer as Artist*; Carlos Baker, Princeton, 1972, p. 283.
- ③ *ibid.*, p. 253.
- ④ *Ernest Hemingway*; Philip Young, Minnesota Univ. 1963, pp. 17-18.
- ⑤ 「ヘミングウェイ研究」; 谷口陸男, 三笠書房, p. 230.
- ⑥ *Death in the Afternoon*, Jonathan Cape, 1963, p. 119.
- ⑦ *ibid.*, p. 79.
- ⑧ *ibid.*, p. 85.
- ⑨ *ibid.*, p. 105.
- ⑩ *ibid.*, p. 142.
- ⑪ 「パパ・ヘミングウェイ」A・E・Hotchner; 中田耕治訳, 早川書房, p. 83.
- ⑫ *The First 49 Stories*; Jonathan Cape; 1962, pp. 39-40.
- ⑬ *ibid.*, p. 66.
- ⑭ *ibid.*, pp. 25-26,